

福井県方言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kato, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34944

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



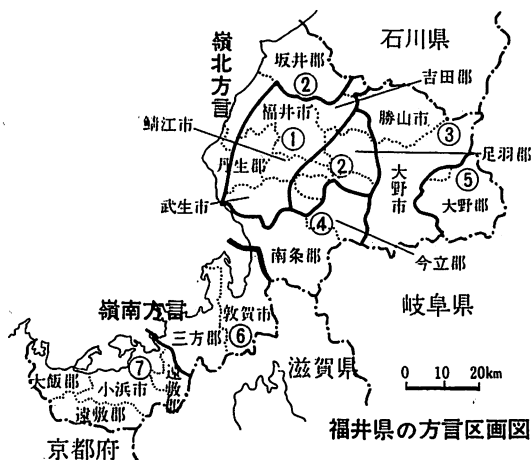
福井県方言

Ⅰ 調査地点を中心とする方言の概観

福井県は本州日本海側のほぼ中央に位置する。北陸地方の中では最も南にあり、北を石川県、東を岐阜県、南を滋賀県・京都府に接している。

方言区画は東の岐阜県との境に東部方言と西部方言の境界が走り、また、JR 北陸線の北陸トンネルが下を貫く木ノ芽山嶺を境に北陸方言と近畿方言の境界が走る。県内では木ノ芽山嶺を境として北を嶺北地方、南を嶺南地方と呼ぶが、嶺北と嶺南の境でことばが大きく変わると意識している人は多い。福井県は旧国名で言う越前と若狭の二国に分かれるが、越前は嶺北地方に南の敦賀市を合わせた範囲であり、旧国の境と方言区画が一致しない点に注意したい。

福井県の方言区画について地図上にそれを示したもののには奥村三雄氏のもの(『方言学講座第三巻 西部方言』113頁参照)があり、それをもとに筆者が若干書き改めたものを「北陸地方の方言研究」に載せたことがある。奥村氏の区画は概ねアクセントの分布に拠ったものと思われるが、図はそれの細かな点一部を省いて筆者が再度書き改めたものである。



先述のとおり、県内の方言は嶺北方言と嶺南方言にまず大きく分けられる。音韻、アクセント、文法、語彙などにおいて多くの等語線がここを走る。嶺北方言と嶺南方言が異なる方言事象の一例を挙げると次のようなものがある。左が嶺北方言、右が嶺南方言の代表形式である。

「氷柱」 タルキ ーツララ、ナンリョー
 「女」 メ(ー)ローオナゴ
 「塩辛い」 クドイ ーカライ

これに対し、嶺北方言・嶺南方言それぞれの内部での地域差は、嶺北方言のアクセントや一部の語彙を除けばそれほど大きなものではない。嶺南方言では東部の敦賀市・三方郡が、その地理的位置からも語彙の分布などにおいて、嶺北方言と京都方言的な西部の遠敷郡・小浜市・大飯郡の方言との中間的特徴を示すことも多い。

嶺北方言には無型・曖昧・京阪式・東京式の各種アクセント型が混在し、大変複雑な様相を呈する。平山輝男氏・奥村氏など諸氏の報告に従えば、その分布は概ね図中①の範囲が無型アクセント(調査地点福井市小稲津町はここに含まれる)、それを取り囲むように②が曖昧アクセント、③と④はタイプは異なるが京阪式に準ずるアクセント、⑤が東京式アクセント(この地域はダム建設にともないほとんどの集落が水没した)である。一方、嶺南地方のアクセントは、⑦の範囲が垂井式アクセント、⑥が準垂井式アクセントとされる。

II 方言の特色

調査地点である福井市方言の特色を中心に述べ、適宜他の県内方言についても触れることにする。

1. 音韻

(1) 母音の特色

- ① ア・エ・オについては共通語にほぼ同じで目立った特徴はない。ウも東京語と同様の平唇の[w]であるが、嶺南方言では嶺北方言にくらべやや円唇的である。イは語頭においてエと混同しやすい傾向がややみられる。また、[aj̥ta] (飽きた)のように、アに後接する語中尾で舌の位置が下がりエとの中間音に近く発音される傾向がある。

- ② 福井市を含む嶺北方言では共通語とほぼ同じ音環境で母音[i][u]に無声化が起こりやすい。一方、嶺南方言、特に嶺南西部方言ではあまり無声化は目立たない。

- ③ 連母音の融合は嶺北方言で ai, oi の場合に語的(形容詞に多い)[ex]となることがあり、イケー[ikeɪ:](いかい=大きい)、ナゲー[nageɪ:](長い)、ネー[neɪ:](無い)、[oseɪ:](遅い)などのように発音される。ei は共通語と同様[ex:]となる。その他、au, ae, ao, iu, ie, io, ui, ue, uo, oe などでは融合はみられない。

(2) 半母音の特色

かつて嶺南地方では三方郡の一部で合拗音[kwa][gwa]が聞かれたというが、現在では福井県下でそれを確認することはできない。直音化の傾向はなく、ウォ[wo]もない。[we]は語的に[kawe:raʃi:](かわいらしい)の場合などに聞かれることもある。

(3) 子音の特色

- ① コソアドのソに当たるソレ、ソノ、ソコ、ソシテ、ソヤ(そうだ)などの[s-]が[h-]となり、ホレ、ホノ、ホコ、ホイテ、ホヤのようになる。

東京語のようなヒとシの混同は少ないが、ヒチ[çiʃi:](七)、ヒツコイ[çitsukoi:](しつこい)のように、語的にシがヒとなるものがある。

サ行・ザ行のセ・ゼは中・高年層でシェ[je]・ジェ[dʒe]となる。シェ・ジェは若年層では完全に衰退している。

- ② 語中尾のガ行子音は調査地点を含む嶺北方言では鼻濁音[ŋ]である。ただし、若年層ではしだいに破裂音化の傾向が観察される。嶺南地方は鼻濁音も聞かれるが、概ね摩擦音[ɣ]あるいは破裂音[g]となる。

- ③ 東北方言などにみられる語中尾のダ行・バ行の前の前鼻音は現れない。同様に東北方言などでみられる無声子音の有声化のうち、カ行・タ行の有声化が嶺北地方北部の方言に語的に認められる。吉田則夫氏の報告によれば大野市ではカ行の有声化がかなり規則的に現れるという。

- ④ 破擦音ツァ・ツォが、オッツァ(父親の卑称)、ゴッツォサン(ごちそうさま)などの語で現れる。

- ⑤ ダ行とラ行に稀に混同(主にラ行→ダ行)がみ

られる。

例) ダジオ(ラジオ), ダイネン(来年)

- ⑥ 県内全域で四つ仮名の区別はなく、東京語と同じ二つ仮名弁である。

(4) 特殊拍の特色

城生伯太郎氏によれば嶺北地方北部のごく一部の方言が北の石川県とともにシラビーム方言とされているが、調査地点を含め県内のほとんどは、長音・促音・撥音が独立してアクセントの山を担うことのできるモーラ方言である。

ただし、特殊拍のうち長音については東京語に比べ長さが不安定で三拍以上の語ではガッコ(学校), ワロタ(笑った)のように長音がなくなることもある。また、東京語で一拍の名詞を母音をのばして、キー(木), ヒー(火, 日)・メー(目)のように発音する傾向もみられるが、若年層では衰退している。

2. アクセント・イントネーション

福井県内のアクセント分布の概略については先にも述べたが、調査地点はそのうちの無型アクセント地域に含まれる。近年、杉藤美代子、佐藤亮一、山口幸洋の各氏により、従来無型アクセントと考えられてきた福井市周辺部の高年層に有型アクセント話者の存在することが報告され注目を浴びたが、当該地点の話者については型知覚は有しないものと判断したので、ここではアクセント体系を示すことができない。

イントネーションについては、富山県から福井県嶺北地方にまで広く分布する北陸方言に特徴的な「うねり音調」「ゆすり音調」「波動音調」などとも)と呼ばれる独特のイントネーション(へ, へ, のようなイントネーションで実現)が文節末や文末に現れる。

3. 文法

(1) 動詞

- ① 意志形は、書コ(一)(書こう), オキヨ(一)(起きよう), ヤメヨ(一)(止めよう), シヨ(一)・シヨ(一)(しよう), コ(一)(来よう)のようになる。それぞれ括弧に入れて示した長音の形も聞かれるが、むしろ長音のない形が一般的

である。

- ② 打ち消し形はーンであり、カカン(書かない), オキン(起きない), ヤメン(止めない), シェン(しない), コン(来ない)のようになる。嶺南方言ではーンのほかに、ーヘン, ーシェンも聞かれ、カカヘン, カカシェン(書かない), ミヤヘン・ミヤシェン(見ない)などになる。
- ③ タ<過去>・テ<中止>に接続する音便形には促音便, 撥音便, ウ音便, イ音便があり、トッタ(取った), ヨンダ(呼んだ), ヨンダ(読んだ), コータ(買った), クタ(食った), モロタ(貰った), カイタ(書いた), コイダ(漕いだ), ホイタ(干した), オトイタ(落とした)のようになる。

このうち、ホイタ(干した), オトイタ(落とした)のサ行イ音便は、嶺北方言では若年層でこそ衰退しつつあるものの、中・高年層では現在もよく用いられる。ただし、すべてのサ行五段動詞が音便化するわけではなく「押す, 消す, 越す, 貸す, 足す, 試す」などはオイタ, ケイタ, コイタ, カイタ, タイタ, タメイタとはならない。一方、嶺南方言ではその衰退は著しく、旧若狭国の範囲では遠敷郡上中町河内など一部の集落でのみ使用が確認される。

- ④ 丁寧表現ではまず、尊敬の助動詞としてーナサル, ーナハル, ーナルが調査地点を含む嶺北地方で広く聞かれる。

例) ドコ イキナサルンデスカ(どこにいらっしゃるんですか), ジョーズニ カキナハッタネー(上手にお書きになりましたねえ), マダ カインナラン(まだお帰りにならない)

嶺南地方ではこの他、ーツシャル, ーンス, ーテヤ・テジャ・テデスなどが分布する。尊敬の動詞としては「行く・来る・居る」の意味のオイデルがよく聞かれる。

丁寧の助動詞としては全域でーデスが用いられる。

この他、「～ございます」に当たる言い方でーゴゼンスがアリガトゴゼンス(ありがとうございます)のように使われ、また「～てください」にあたる言い方でートクンナサイ・ートクンナセーがマツトクンナサイ・マツトクンナセー(待ってください)のように使われる。

- ⑤ 仮定形は、-バよりもカイタラ(書けば)、ヨ
ンダラ(読んだら)のように-タラがよく用いら
れる。
- ⑥ 命令形は、カケ(書け)、ミヨ(見ろ)、ネヨ
(寝よ)、コイ(来い)、シェー(しろ)が用いられ
るが、これらは男性に多く、女性は柔らかな命
令表現として「～なさい」「～なさいよ」にあ
たる-ネ(-)、-ネマを用いることが多い。

例)ハヨ カキネー(早く書きなさい)

ハヨ オキネマ(早く起きなさいよ)

- ⑦ 一段動詞のラ行五段化は認められない。その
他、二段活用もみられず、いわゆる変格活用
(来る・する)の一段化の傾向もない。
- ⑧ 「死ぬ」は県内全域でガ行に活用するシグの
形で、「往ぬ」は嶺南地方で用いられるが、い
ずれも五段活用化しており、かつてのナ変活用
の名残はない。

(2) 形容詞

- ① 打ち消し形は、調査地点を含む嶺北方言では
ネー(ない)に前接しアコネー(赤くない)、タコ
ネー(高くない)、イコネー(大きくない)のよう
にいう。嶺南方言ではネーがナイになり、アコ
ナイ(赤くない)のようになる。
- ② 「～なる」に続く形は、県内全域でアコナル
(赤くなる)、タコナル(高くなる)、ウレシナル
(嬉しくなる)のようになるが、嶺北方言では語
的にオモッシュナル(面白くなる)のような形も
現れる。
- ③ 「～ければ」に続く仮定表現では、アカケ
リャ・アカカッターラ(赤ければ)のような形が現
れる。

例)ネダンガ タカケリャ・タカカッターラ

カワンホーガ イー(値段が高ければ買わ
ない方がいい)

- ④ 言い切りの形では、アカイ(赤い)、サブイ
(寒い)、サビシー(寂しい)などの形のほか、ア
ケー(赤い)、ヒデー(ひどい)のように母音が融
合した形、さらにオモッシュェー(面白い)、ウレ
ッシャ(嬉しい)のような形もみられる。

(3) 形容動詞

形容動詞は、例えば終止形で東京語の「静か
だ」の「～だ」の部分がジャやヤになり、シズカ

ジャロー・シズカヤロー(静かだろう)、シズカ
ジャッターラ・シズカヤッターラ(静かだったら)、シ
ズカデネー(静かでない)、シズカンナル(静かに
なる)、シズカジャ・シズカヤ(静かだ)、シズカ
ナヒト(静かな人)、シズカナラ(静かなら)、シズ
カナリャコソ(静かなればこそ)のように活用する。
-ジャは高年層に多く、中年層・若年層では-ヤ
が多い。

(4) 文末表現など

- ① 尊敬の助動詞には、先に(1)動詞の部分でも
触れたように、嶺北方言で-ナサル、-ナハル、
-ナルがある。嶺南方言ではその他に地域によ
り、-ッシャル、-ンス、-テヤ・テジャ・テ
デスが分布している。
- ② 指定・断定の助動詞にはジャとヤがあり、嶺
北方言では高年層でジャが優勢であるもの
中・若年層ではヤになっている。嶺南方言では
東の三方郡以東でこそ高年層にジャが聞かれる
が、全体的にはヤが圧倒的に優勢である。推量
の助動詞はジャロー・ヤローが用いられる。
- ③ アスペクトに関しては、嶺北方言では進行
態・結果態のいずれも-テル(桜の花が散っテ
ル)で表現し、東京語と同じく区別がない。嶺
南方言では形式こそ-トル(桜の花が散っトル)
となるが進行態と結果態を形で区別しないのは
同じである。
- ④ その他、特徴的な文末表現としては、「～だ
よ」に近い意味で、-トコト、-トコトイヤが
ある。

例)ホヤトコト、ホヤトコトイヤ(そうだよ)

(5) 助詞

- ① 助詞のうちヲ格は省略されることが多い。

例)ミズ ノム(水を飲む)、ハナ カム(鼻を
かむ)、カサ サイテク(傘をさして行く)

ガ格は前にくる名詞に融合して、アメァ フ
ル(雨が降る)のようになったり、アメ フッテ
キタ(雨が降ってきた)のように省略されたりす
る。

ハ格(便宜上こう呼ぶ)も、やはり前にくる名
詞に融合して、コドモァ ショージキヤ(子供
は正直だ)、アタマー イーケド(頭はいいけれ
ど)のようになることが多い。

目的地を表すニ格も省略されることが多い。

例) トーキュー イク(東京に行く)

- ② 原因・理由を表す「から」に当たる助詞としてサカイ・サケ(ー)とデが用いられる。

例) アメァ フッテルサケ イクノワ ヤメヤ、アメァ フッテルデ イクノワ ヤメヤ(雨が降っているから行くのはやめなさい)

嶺北方言では、かつてはサカイ・サケ(ー)が優勢であったが、最近は若年層を中心にデの方が多く用いられ、共通語の影響によるカラも聞かれる。

- ③ 「～ても、～だって」に当たる助詞にカッテがある。

例) ホンナコト ユータカッテ アカン(そんなこと言ってもだめだ)、アノヒトヤカッテ イキタカッタンヤ(あの人が行って行ったんだ)

- ④ 「～けれども」に当たる助詞は嶺北方言でケド、嶺南方言でケンドとなる。

例) アタマ イテーケド ガマンシテ ガッコ イッタ(頭が痛いけれどもがまんして学校に行った)

- ⑤ 終助詞のうちで特徴的なものをいくつか挙げる。東京語の「よ」「ぞ」に当たるものとして、嶺北方言ではザが現れ、ホンナコト シタラ アカンザ(そんなことはいけないよ)、ホンナコト ネーザ(そんなことないよ)のように使われる。

やはり東京語の「よ」に当たるもので、命令表現の中で用いられる終助詞にマがある。やさしい命令で女性に多く用いられるものである。これも主に嶺北地方で聞かれる。

例) ハヨ イキネマ(早く行きなさいよ)

4. その他

福井県の嶺北地方では、かつては動物や虫を卑称化するメという接尾辞がよく用いられた。イヌメ(犬)、ネコメ(猫)、ウシメ(牛)、ノンメ(蚕)のようである。こうした言い方も最近ではあまり聞かれなくなった。同種のメは栃木県や八丈島でも聞かれる。

その他、代名詞では嶺北地方で自分をさす言い方にウラ・ウララ(ウララは複数を表す場合もある)が用いられる。また相手をさす言い方には丁寧な言い方にアンタサン、普通の言い方にアンタ、卑称としてオメ(ー)、ワレがある。

5. 参考文献

1. 昭和 28～29 「福井県嶺北方言の音調とそ
(1953～54) の境界線 1-3」(平山輝男、
『音声学会会報 83-85』)
2. 昭和 36 「方言の実態と共通語化の問題点：
(1961) 京都・滋賀・福井」(奥村三雄、
『方言学講座第三巻 西部方言』、
東京堂)
3. 昭和 37 『近畿方言の総合的研究』(榎垣実
(1962) 編、三省堂)
4. 昭和 54 「地域別方言の特色—福井方言」
(1979) (佐藤茂、『全国方言基礎語彙の研究
序説』、明治書院)
5. 昭和 58 『講座方言学 6 中部地方の方言』
(1983) (国書刊行会)
6. 平成 1 「福井県若狭地方における語法の
(1989) 分布とその解釈(二)」(加藤和夫、
『和洋国文研究 第 24 号』)
7. 平成 2 「北陸地方の方言研究」(加藤和夫、
(1990) 『日本方言研究の歩み』、角川書
店)

(加藤和夫)